

研究授業「保育方法論」における保育事例の活用についての考察

山田 純子*

Consideration on use of childcare example in open class “Methodology for Childcare and Education”

Junko Yamada

要約

本稿は、2015年度に高松大学発達科学部において実施された研究授業「保育方法論」の実施をもとに、授業における保育事例の活用についての考察をまとめたものである。

本時の主題は、「個と集団のかかわり～保育者の指導・援助について」である。

この報告書は、実施概要、検討事項、及び、今後の研究課題で構成されている。

キーワード：保育方法論、個と集団のかかわり、保育者の指導・援助、保育事例の活用

(Abstract)

This paper reports on an open class held at the Faculty of Human Development at Takamatsu University during the first term in 2015 and summarizes consideration on use of childcare example in the class.

The lesson, titled “The Relation between an Individual and a Group,” focused on how teachers should instruct and support children in the nursery room.

This paper covers the outline of the procedures, the problems to be examined, and the questions in the future.

KeyWords: methodology for childcare and education, relations between individuals and groups, instructions and supports to nursery teachers, use of childcare example

* 提出年月日 2015年11月30日、高松大学発達科学部准教授

はじめに

「保育方法論」では、保育方法の実際を理論的に学び、保育者の指導や援助について理解を深め、遊びを充実させる環境構成や指導計画を構築していく実践的な力量を養うことを目指している。本科目は、幼稚園教諭一種免許状取得のための必修科目であるという性格から同 Semester の「観察参加Ⅰ」を履修する学生も受講している。そこで、講義と実践現場の両面から学びを得られる学習環境を生かし、観察参加の配属園でのエピソードや学生の気付きを授業に取り入れ、理論と実践が繋がるよう授業内容の工夫を行っている。

今回の研究授業後の検討会では、学部教員間での学生の学習状況や授業内容の共通理解、そして、授業の内容・方法についての協議が行われた。以下、授業の実施記録や発達科学部教員による協議内容、授業者の省察をもとに授業における保育事例の活用について考察していく。

1. 実施の日程

(1) 研究授業

日 時：平成27年7月2日（木）2校時 10:40～12:10

場 所：本館309講義室

授 業 科 目：保育方法論

授業担当者：山田 純子

授 業 形 式：講義

対 象 学 生：発達科学部子ども発達学科 2年次生 43名

参観教員数：発達科学部子ども発達学科教員 7名

(2) 検討会

日 時：平成27年7月2日（木）5校時 16:20～17:50

場 所：2号館2階 2217演習室

参加者数：発達科学部子ども発達学科教員 7名

2. 「保育方法論」の授業計画

(1) 【授業の紹介】

幼稚園教育要領や保育所保育指針をふまえ、「環境を通して行う教育」という基本に基

づいた保育方法の実際を理論的に学ぶ授業である。講義を中心とするが、演習も取り入れ、今後の実習等に生かすことができるように進めていく。なお、本科目は、幼稚園教諭一種免許状取得のための必修科目である。

(2) 【到達目標】

- ① 保育方法に係る基本的理念の理解を通して保育者としての使命感・倫理観を養う
- ② 継続的学習を通して自己と向き合い豊かな人間性を育む
- ③ 保育者の指導・援助について理解を深め、必要な知識・判断力を身に付ける
- ④ 遊びを充実させる環境構成や指導計画を構築していく基礎技能を養う

(3) 【授業計画】

- 第1回 オリエンテーション
- 第2回 保育の基本と保育方法
- 第3回 幼児理解とその方法
- 第4回 環境の構成と保育の展開
- 第5回 一人一人に応じた指導
- 第6回 遊びの指導
- 第7回 生活の指導
- 第8回 発達に応じた指導（0～2歳児）
- 第9回 発達に応じた指導（3～5歳児）
- 第10回 さまざまな保育形態
- 第11回 個と集団のかかわり（本時）
- 第12回 園内外の環境を生かした保育
- 第13回 保育の計画と実践・評価
- 第14回 保育者に求められる専門性（1）保育の基本の理解
- 第15回 保育者に求められる専門性（2）保育の展開と環境の構成

(4) 【授業時間外の学習】

- ① 次回の授業の予習として、テキストをよく読んでおくこと
- ② 毎時の振り返りにより理解を深めるよう努めること

(5) 【成績の評価】

授業態度、課題・ワークシートの提出内容及び期末試験の結果により総合的に評価し、単位を認定する

(6) 【使用テキスト】

神長美津子・塩 美佐枝 編著『新保育シリーズ 保育方法』（光生館、2009年）

(7) 【参考文献】

授業内で随時紹介

3. 本時の概要

(1) 授業題目

個と集団のかかわり～保育者の指導・援助について

(2) 本時の指導目標

- ① 発達の時期を踏まえた一人一人の育ちへの指導・援助の方法について理解する。
- ② 事例を通して、幼児が学び合うために必要なことは何かについて考える。

(3) 授業内容と指導上の留意点・工夫

「個と集団」については、第3回授業で、「幼児理解とその方法」という視点で取り上げ学習した。日々の保育は個々の一人一人を見る目と学級集団の両方を見る目が必要である。つまり、幼児の集団としての姿と一人一人の姿は独立したものではなく、全体をとらえることで一人一人の発達する姿が見えてくるのである。

本時は、このようなこれまでの学習を基盤とし、保育の展開を考える際に踏まえておくこととして、「個への指導・援助と学級づくり」という視点で学習を進め、本時のねらいを達成したいと考えた。そして、事例の読み取り作業のなかで、キーワードを書き出すという課題を提示することを試みた。この提示により、学生自身がよく考え、自ら援助のポイントを導き出すことができると考えた。

また、指導内容によりテキスト、ワークシート、スライド、OHCを使い分けて使用し、具体的なわかりやすい説明となるように留意した。

(4) 授業の展開

① 導入（動機づけ）

自分が学級担任であるとして、具体的にはどのような学級にしたいと思うか。また、そのためにどのようなことを考え、配慮をして学級づくりを行うか。という課題を学生に提示し、学級づくりという視点を身近な自己の課題として取り組み、考えをまとめていけるようにする。

② 問題提起1

「一人一人の発達の特性に応じる」ことと「学級集団」との関係について考えよう。その手がかりとして、幼稚園教育要領（同解説）、保育所保育指針（同解説書）の記述を確認していく。

◇まとめ

「一人一人に応じる」保育の探究を「集団の中で一人一人を生かす」視点に立つ保育方法によって行うのである。すなわち、集団の育ちと個の育ちは相互作用の関係であるということを押さえる。

③ 問題提起2

園における幼児の集団生活経験について考えさせる。園児が所属する集団の特性に注目しよう。体験をつなぐ場としての学級（系統的な組織）というとらえがある。フルコース型の保育についての記述（倉橋惣三「幼稚園真諦」）を例にし、生活に系統性をもたせることは保育者の役割の一つであることを説明する。

◇まとめ

幼稚園や保育所は幼児が集団で生活する場である。その集団の中で家庭では得ることが難しい幼児同士のかかわりの楽しさを味わったり互いに影響を受け高め合ったりしていくのである。

その際、個々の幼児の体験を少人数（ペア）や小集団（数人のグループ）、学級単位の集団等につないでいく役割を担うのが保育者の重要な役割である。また、幼児が個々の活動への取り組み（事物への個々の興味）に対して、それを生活的興味として発展させていくことにより系統性が生まれ、生活が充実していくのである。

④ 発展

事例をもとに保育者の援助のポイントを導き出す。そして、幼児が学び合うために必要なことは何かについて考える。

手順として、まず、授業テキストを用い、保育者の援助の個所にアンダーラインを引く。次に、それぞれの事例についてキーワードを考え、ワークシートに書き記すよう指示する。

◇まとめ

保育者は、幼児の今の状態をより適切にとらえ、常に見直しと改善を心がける取り組みが求められる。以下は、事例から読み取れる各年齢の幼児の援助のポイントである。

1) 3歳児の援助のポイント

- ・ 幼児一人一人の表現の仕方の特性を見つめ、心の動きに目を向ける。
- ・ 保育者への安心感や信頼感がもてるように一人一人への丁寧な対応をしながら全体に目を配る。
- ・ 遊びの動線を考慮し、静かに遊べる場と思いつき体を動かせる場を少し離すなどして、互いに不快感をもたなくて済むようにする。
- ・ 個人を否定するような言い方や欠点が注目されるような言葉を避け、寛容な受け止め方を保育者が心がけて言葉に出していく。
- ・ 危険なことや相手を傷つけることに対しては「危ない」、「それは言ってはいけないこと」とはっきりと知らせていく。

2) 4歳児の援助のポイント

- ・ 一人一人がやりたいことが見つけられるような時間を十分に確保する。
- ・ 頑張っている姿、試したり工夫したりして本人がひとつ満足感がもてた瞬間をとらえ、言葉に出して認めていく。そして、そのことが周りの幼児の刺激となり情報として受け止められるようにしていく。また、「友達を認める」、「ほめる」ということが自然に行われるように保育者が見本になっていく。
- ・ ルールはわかりやすく複雑でないものにし、あとで自分たちで遊べるようにする。
- ・ 友達と手や体が直接触れ合う遊びも多く取り入れる。
- ・ 互いの気持ちを聞き出しながらその思いを受け止め共感していく。その後、相手の考えに耳を傾けることができるように話をもっていく。
- ・ 解決を目的にせず、「次の遊びを楽しくしようよ」という気持ちで援助をし、気分転換や感情のコントロールができるような援助を心がける。

3) 5歳児の援助のポイント

- ・一人一人の興味・関心のあることをとらえ、保育者も目を向けて、子どもたちと一緒に考えていく。そのことで、学級として伝わり合える関係づくりをしていく。
- ・意図的に話し合う活動を取り入れていく。
- ・友達とのやり取りの中で、評価し合うことや認め合うことについての発言は大事にし、自分に気付いていけるよい機会になるよう助言をしていく。
- ・一人一人の育ちを学級全体に伝えて生かしていく指導を重ね、共同的な活動などを通して協力し合い力を出し合う経験を積み重ねていく。

⑤ 振り返り

本時の授業内容を各自、ワークシートにまとめる。

⑥ 次回授業についての周知

予習課題について周知する。

(5) 本時の指導案

時間	学習内容	指導上の留意点
10:40	○前回ワークシートの返却・本日シートの配布 ○挨拶 ○前回学習事項の確認	○スムーズな配布になるよう事前準備しておく。 ○学習準備ができていないか意識を促す。 ○前回のワークシートの振り返りから復習を行い、誤解を正し、よりよい理解を深める。
10:45	○テーマ：「個への指導・援助と学級づくり」 ○学級づくりについて考えをまとめる	○本時の学習内容について周知し、学習の動機付けをする。 ○学級づくりという視点を自己の課題となるよう身近な例を挙げて考えをまとめるヒントを与える。 ○互いの意見を交換する場を設ける。
11:00	○幼稚園教育要領、保育所保育指針の記述を確認する	○幼稚園教育要領、保育所保育指針の記述を確認し、「一人一日との発達の特性に応じる」ことと学級集団との関係に気付かせる。
11:15	○園児が所属する集団の特性について	○園における幼児の集団生活経験を把握することが大切であることを気付かせる。
11:30	○事例を通して保育者の指導・援助を学ぶ	○事例を通して幼児が学び合うために必要なことは何かについて考えさせる。 ・保育者の援助のポイントにアンダーラインを引く。 ・キーワードを書き出す。
12:05	○振り返りを記す	○次回授業についての周知をする。

4. 授業に対する参観者の評価

(1) 授業を積極的に評価できる点

① 教育内容

- ・ 指導内容が教育要領に準じていることがよい。
- ・ 本授業と「幼稚園観察参加」の体験とが繋がるように指導内容が吟味されている。
- ・ 学生の振り返りシートからとらえられた学習の理解状況や誤解していることを次回に的確に伝えていた。学生の振り返りを生かしている。
- ・ 学生の行う活動を取り入れるという最近の傾向を踏まえており、よく計画されていた。
- ・ 本時の開始時に授業内容が明確に示されているので、学生は目当てがもちやすいであろう。

② 授業方法

- ・ 事例を多く扱っていた。理論として学んだことがイメージしやすいので、学生の理解に大いに有効である。また、事例検討を取り入れているのは興味深い方法である。事例を読み、キーワードを考える、援助のポイントを導き出すなど学生がよく考える授業となっていた。
- ・ 学生が意識を集中して思考してほしい場面で、スライドを効果的に使用するなど工夫がなされていた。
- ・ 学生自身が考える、書く、読む、発表するという方法をとっているので、学生の集中力が持続しやすいと感じた。
- ・ テキストを丁寧に扱っている。事例の読み取り方にも言及していることがよい。

③ その他

- ・ 学生は静かな雰囲気の中で授業を受けていた。学生は関心を寄せて授業を受けていた。静かに聞いているということは理解できているととらえてよい。
- ・ 授業が計画通りに行われていた。時間配分もとてもよいと感じた。丁寧な授業である。
- ・ 集団のとらえ方を豆腐、納豆など身近な比喻を用い、学生が受け入れられやすい言葉遣いや対話的進行に努めている。
- ・ 具体事例がイメージしやすいものであるので、集団という言葉が観察参加で出会う子どもの姿と結びつきやすくなると感じた。

(2) 授業の改善にかかわる点

① 教育内容

- ・ある人物の主張や論説を取り上げる際、それについて学生がその通り受け止めるのではなく、疑問をもち、調べや確認の作業を促すことが大切である。
- ・対話から討議、考察に深めていくような内容の充実を図るとよい。

② 授業方法

- ・学生は正解を安易に求めるので、考えや気付きを引き出す努力が必要である。学生自身が各自の考えをまとめ発表し合う場面が意図的に設けられていたことがよかったので、さらに充実させるとよい。

③ その他

- ・学生の発表する声が小さいことが気になった。先生になる者は大きな声が必要であるので、注意喚起をしたい。
- ・授業案がよく練られていたが、細案を示してもらおうとさらに授業者の意図がよく理解できると思う。

(3) 授業全体の感想

- ・学生が心を働かせて授業に臨んでいることが見て取れ感心した。
- ・なぜその方法をとるのか、疑問や気付きをもたせたい。揺さぶるということは大学には必要である。
- ・理論で得る学びを自分のものにするには実際の子どもや保育者の姿と結びつける必要がある。授業に事例を活用する必要性を痛感した。

5. 授業における保育事例の活用についての考察

(1) 自己省察と授業改善の課題

本科目は、3セメスターに設定され、幼稚園教諭一種免許状取得必須及び保育士資格取得選択必須科目のため、同セメスターの「観察参加Ⅰ」を履修する学生も全員受講している。そこで、講義と実践現場の両面から学びを得られる学習環境を生かし、観察参加の配属園でのエピソードや学生の気付きを授業に取り入れ、理論と実践が繋がるよう授業内容の工夫を行っている。

本時では、テキストの事例を基に事例の読み取り学習を取り入れた。その際、さらにイ

メージしやすいように観察参加でのエピソードを取り上げて注釈を加えた。

また、事例の読み取り作業のなかで、キーワードを書き出し、自分でまとめるという課題を提示することを試みた。この提示により、学生自身がよく考え、自ら援助のポイントを導き出すことができると考えたためである。手順としては次のとおりである。まず、授業テキストを用い、保育者の援助の個所にアンダーラインを引く。次に、それぞれの事例についてキーワードを考え、ワークシートに書き記す。そして、そこから保育者の援助のポイントを導き出す。さらに、幼児が学び合うために必要なことは何かについてまとめる。

学生は、保育に関する専門科目の学習が始まったところであるため、講義だけでは保育のイメージが持ちにくいようである。しかし、具体事例を挙げて説明すると、観察参加で体験したことと学習内容が一致し、理解しやすいようである。

授業検討会では、丁寧な授業である、学生は授業内容に関心を寄せて授業を受けていた、と評価を受けた。このご意見を学生に理解しやすい内容や方法であった、という評価ととらえ、本授業が量や質において学生の実態に合った内容であったと考える。

今回の試みで、本授業における事例の活用のポイントとして、適時性がキーワードであることを再確認した。つまり、学生自身が保育について関心や疑問、気づきなどがあるときをとらえて深めていくことが学びの定着化に繋がると考える。そのためには、学生の知識や関心の状況を把握しておく必要がある。

そして、さらに学生の学習の理解度を確認しながら、フィードバックし学習の定着化を図っていく必要がある。

(2) 今後の授業研究の見通し

教示するという事は、学生の立場になって考え行うことである。事例を通して理論と実践を繋いでいくことが学生の理解に有効であることを再確認できたので、今後も身近な事例を取り上げていきたい。その際に、学生が経験していること、興味・関心をもち知りたいと願っていること、などを把握するための調査を授業時に行い、その実情に応じた教材、事例を研究し、活用していきたい。

さらに、本科目と「観察参加」との関連付けや他科目との関連付けも意識して取り組んでいきたいと考える。

引用文献

神長美津子・塩 美佐枝 (2009)「新保育シリーズ 保育方法」光生館
文部科学省 (2008)「幼稚園教育要領解説」フレーベル館
厚生労働省 (2008)「保育所保育指針解説書」フレーベル館

参考文献

倉橋惣三 (1976)「幼稚園真諦」フレーベル館
高杉自子・有賀和子 (1999)「保育方法論」光生館

〈資料1〉授業で使用したプレゼンテーションのスライド

第11回 個と集団のかかわり

I 幼稚園教育要領からみる視点

1 幼稚園教育要領 人間関係 内容の取扱い(2)
「幼児の主体的な活動は、他の幼児とのかかわりの中で深まり豊かになるものであり、幼児は其中で互いに必要な存在であることを認識できるようになることを踏まえ、一人一人を生かした集団を形成しながら人とかかわる力を育てていく」

2 「一人一人に応じる」保育の探究を「**集団の中で一人一人を生かす**」視点に立つ保育方法によって行うのである。

集団の育ち ↔ 個の育ち
相互作用

II 園における子どもの集団生活経験

1 園児が所属する集団の特性
(1) 2人組あるいはペアという集団
2歳児、入園当初は2人で行くことを好む。安定する。
2人組は他者を知っていく最初の段階

(2) 小集団(数人のグループ)
気の合う遊び仲間の集団の規模
意図的につくる班

(3) クラス単位の集団
クラスでひとつの目的に向かって取り組む活動の場合、班活動を取り入れることがある。
個人個人が持ち前を發揮して取り組むことができる。
系統的な組織
↳ 体験をつなぐ場としての学級

2 リーダーの育成

(1) クラスの利益を守り、仲間から信頼されるリーダーシップをもつ存在が必要になる。
≠よい子

(2) 力関係を変える
・リーダーを中心としてみんなの力で実現していくことを学ばせる
・どの子にもリーダーシップが身につく、子どもの力関係を対等な協力関係に変えていくことを目指す。

III 事例から

〈資料2〉 授業で使ったワークシート

平成27年度 保育方法論 第11回

学籍番号 () 氏名 ()

個と集団のかかわり～保育者の指導・援助について

◇ はじめに・・・学級づくりについて

【問1】 あなたが学級担任であるとして、どのような学級にしたいですか

【問2】 そのために、どのようなことを考え、配慮をして学級づくりを行いますか

I 幼稚園教育要領、保育所保育指針の記述を確認してみよう

◇ 幼稚園教育要領

○第1章総則 第1 幼稚園教育の基本

3 幼児の発達は、心身の諸側面が相互に関連し合い、多様な経過をたどって成し遂げられていくものであること、また、幼児の生活経験がそれぞれ異なることなどを考慮して、幼児一人一人の特性に応じ、発達の課題に即した指導を行うようにすること。

⇒「幼稚園教育要領解説」から

ただし、幼児一人一人に応じるとはいつでも活動形態を個々ばらばらにするということではない。幼稚園は () を生かす場である。集団の生活の中で、幼児たちが互いに影響し合うことを通して、() が促されていく。それゆえ、一人一人の発達の特性を生かした集団をつくり出すことを常に考えることが大切である。

○人間関係 内容の取扱い(2)

幼児の主体的な活動は、他の幼児とのかかわりの中で深まり、豊かになるものであり、幼児はその中で互いに必要な存在であることを認識するようになることを踏まえ、() を形成しながら人とかかわる力を育てていくようにすること。特に、集団の生活の中で、幼児が自己を発揮し、教師や他の幼児に認められる体験をし、自信をもって行動できるようにすること。

◇ 保育所保育指針

○第1章総則 3 保育の原理 (2) 保育の方法

ウ 子どもの発達について理解し、一人一人の発達過程に応じて保育すること。その際、子どもの個人差に十分配慮すること。

エ 子ども相互の関係作りや互いに尊重する心を大切に、集団における活動を効果あるものにするよう援助すること。

⇒「解説書」P24から

③個と集団

子どもの発達について理解し、一人一人の子どもの発達過程と個人差に配慮して保育すること、また、() を重視し、() を促すことが記されています。

個と集団の育ちは相反するものではなく、個の成長が集団の成長に関わり、集団における活動が個の成長を促すといった関連性に十分留意して保育することが重要です。その際、子どもの成長・発達について継続的に記録をとり、実際の子どもの姿や言動などから学び、保育に生かしていくことが必要でしょう。

2 まとめ

保育の探究を 視点に立つ保育方法によって行うのである。

II 園における子どもの集団生活経験

1 園児が所属する集団の特性

(1) 2人組あるいはペアという集団

(2) 小集団 (数人のグループ)

(3) クラス単位の集団

III 事例から (テキスト)

IV 振り返り

〈資料3〉ワークシート内の設問の解答

平成27年度 保育方法論 第11回

個と集団のかかわり～保育者の指導・援助について

I 幼稚園教育要領、保育所保育指針の記述を確認してみよう

◇ 幼稚園教育要領

⇒「幼稚園教育要領解説」から

ただし、幼児一人一人に応じるとはいつでも、いつでも活動形態を個々ばらばらにするということではない。幼稚園は（ 集団の教育力 ）を生かす場である。集団の生活の中で、幼児たちが互いに影響し合うことを通して、（ 一人一人の発達 ）が促されていく。それゆえ、一人一人の発達の特性を生かした集団をつくり出すことを常に考えることが大切である。

○人間関係 内容の取扱い（2）

幼児の主体的な活動は、他の幼児とのかかわりの中で深まり、豊かになるものであり、幼児は其中で互いに必要な存在であることを認識するようになることを踏まえ、（ 一人一人を生かした集団 ）を形成しながら人とかかわる力を育てていくようにすること。特に、集団の生活の中で、幼児が自己を発揮し、教師や他の幼児に認められる体験をし、自信をもって行動できるようにすること。

◇ 保育所保育指針

⇒「解説書」P24から

③個と集団

子どもの発達について理解し、一人一人の子どもの発達過程と個人差に配慮して保育すること、また、（ 子ども相互の関わり ）を重視し、（ 集団としての成長 ）を促すことが記されています。

2 まとめ

一人一人に応じる 保育の探究を 集団の中で一人一人を生かす 視点に立つ保育方法によって行うのである。

集団の育ち ⇔ 個の育ち

相互作用

II 園における子どもの集団生活経験

◇ 園児が所属する集団の特性

(1) 2人組あるいはペアという集団

- 2歳児、入園当初は2人であることを好む、安定する。
- 2人組は他者を知っていく最初の段階

(2) 小集団（数人のグループ）

- 気の合う遊び仲間の集団の規模
- 意図的につくる班

(3) クラス単位の集団

- クラスでひとつの目的に向かって取り組む活動の場合、班活動を取り入れることがある
- 個人個人が持ち前を発揮して取り組むことができる。

系統的な組織



体験をつなぐ場としての学級

III 事例から（テキスト）

- 保育者の援助のポイントにアンダーラインを引く
- キーワードを書き出す

執筆者紹介

岡本 彦宗	文 紘	高 高	松 松	大 大	学 学	經 經	營 營	学 学	部 部	講 講	師 師
川崎 由佳	由 紘	高 高	松 松	大 大	学 学	經 經	營 營	学 学	部 部	講 講	師 師
竹内 清紀	清 紘	高 高	松 松	大 大	学 学	經 經	營 營	学 学	部 部	助 助	教 教
花城 裕太郎	裕 太	高 高	松 松	大 大	学 学	經 經	營 營	学 学	部 部	助 助	生 生
松中 昭彦	中 昭	高 高	松 松	大 大	学 学	發 發	達 達	学 学	部 部	卒 卒	授 授
末包 博暁	包 博	高 高	松 松	大 大	学 学	發 發	達 達	学 学	部 部	教 教	生 生
溝渕 利真	渕 利	高 高	松 松	大 大	学 学	發 發	達 達	学 学	部 部	准 准	生 生
向居 眞詞	居 眞	高 高	松 松	大 大	学 学	發 發	達 達	学 学	部 部	卒 卒	授 授
竹谷 美ね	谷 美	高 高	松 松	大 大	学 学	發 發	達 達	学 学	部 部	卒 卒	生 生
川原 あかね	原 あ	高 高	松 松	大 大	学 学	發 發	達 達	学 学	部 部	教 教	授 授
山口 直木	口 直	高 高	松 松	大 大	学 学	發 發	達 達	学 学	部 部	准 准	生 生
田中 美季	中 美	高 高	松 松	大 大	学 学	發 發	達 達	学 学	部 部	教 教	授 授
藤井 明日	井 明	高 高	松 松	大 大	学 学	發 發	達 達	学 学	部 部	准 准	授 授
山田 純子	田 純	高 高	松 松	大 大	学 学	發 發	達 達	学 学	部 部	教 教	師 師
井上 巳子	上 巳	高 高	松 松	大 大	学 学	短 短	期 期	大 大	学 学	准 准	授 授
高塚 順教	塚 順	高 高	松 松	大 大	学 学	短 短	期 期	大 大	学 学	教 教	授 授
田中 崇	中 崇	高 高	松 松	大 大	学 学	短 短	期 期	大 大	学 学	准 准	授 授

研 究 紀 要
第64・65合併号

平成28年 2月25日 印刷
平成28年 2月28日 発行

編集発行 高 松 大 学
高 松 短 期 大 学
〒761-0194 高松市春日町960番地
TEL (087) 841-3255
FAX (087) 844-4759

印 刷 株式会社 美巧社
高松市多賀町1-8-10
TEL (087) 833-5811